

中国人日本語学習者による「のだ」「のか」の使用条件・非使用条件

の習得と日本語能力との因果関係

趙萍 (麗澤大学大学院生), 玉岡賀津雄 (名古屋大学), 木山幸子 (麗澤大学大学院生)

1. 研究の目的

日本語学習者にとって、「のだ」とその疑問形式の「のか」の習得が難しいことはしばしば指摘されている (大場 1995; 小金丸 1990; 近藤 2008; 趙 2008; 名嶋 2003; 野田 1997; 村松 1995 など)。野田 (1997) は、「のだ」と「のか」の習得が難しい理由として、「のだ」自体に実質的な意味がないため正体をつかみにくいこと、基本的な意味を説明するだけでは十分に理解できないほどの機能の広がりをもつこと、さらに「のだ」と「のか」の使用を決めるには文の意味的な情報とともに文脈や状況から得られる情報が必要であることを挙げている。本研究では、「のだ」と「のか」の習得にどのような日本語能力が必要であるかを探るために、次の3つの因果関係を解明することを目的とする。第1に、日本語能力の2つの柱とされている語彙知識と文法知識が、「のだ」「のか」の習得にどのように影響しているか、第2に、「のだ」「のか」を使用すべき条件と使用すべきでない条件の区別ができていくかどうか、またこれらの間に因果関係があるかどうか、第3に、「のだ」「のか」の習得には文脈や状況の理解が必要だと指摘されるが、同様の能力が要求される読解力が影響しているかどうか、を検証する。総合的な日本語能力テストを実施し、構造方程式モデリング (structural equation modeling: SEM) の手法により、「のだ」「のか」の習得に関連した総合的な因果関係を考察する。

2. 「のだ」と「のか」の使用条件および非使用条件: 「既定性」と「関連づけ」の視点から

本研究では、「使用条件」と「非使用条件」の2つの側面から、学習者の「のだ」「のか」の理解の度合いを分析する。「のだ」と「のか」を使用するか否かは、「既定性」と「関連づけ」の2つの視点で説明できる。まず「既定性」について、田野村 (1990) は、「のだ」に前接する部分はすでに定まったことがらであることが多いと述べ、これを「のだ」の「既定性」とした。ただし、「ここで言う既定性とは、表現されたことがらが実際に成り立っている事実であることを意味するものでは必ずしもない (p. 11)」と説明する。例えば、「あっ、財布がない。(キット) 電車の中ですられたんだ。」という文では、電車の中ですられたのか、路上に落としたのか、いずれが事実であるかは分からないが、話し手はその事実がすでに定まっていると想定しているため、「のだ」を用いている。また田野村 (1990) は、既定性による制約から「のか」の使用をも説明する。相手が知っていることや相手の本心が定まっているかどうかなどを聞き出そうとするときには「のか」を用いるとしている。それに対して、まだ定まっていないことがらについて、考慮のうえで返答するよう相手に求めるという状況では「のか」は用いられないと述べている。例えば、「(人ばかりを見て) 何があったんですか？」という文では「のか」を用いるが、「(服を試着して) どう？この服似合う？」のような場合、それ以前に答えが定まっているということはあり得ないため、「のか」を用いることはできない。

一方、「関連づけ」については、野田 (1997) が、「のだ」に前接する言表内容をQとし、(言

語化されるとは限らない) 状況や先行文脈をPとすると、「のだ」は、QをPと関係づけて提示するために用いられると述べている。近藤 (2008) も、「関連づけ」を示すことが「のだ」の基本的な機能であると指摘し、「話し手は会話の場の情報と会話の場に存在しない情報を主観的に関連づけ、それをノダによって会話の場に導入し、その関連づけの解釈を共同注意の態勢にある聞き手に委ねる」(p. 118) と整理している。例えば、「(試験に落ちて) 難しすぎたんです。」には、2つの出来事もしくは事態が関わる。1つは、話し手が試験に落ちたという事実で、話し手と聞き手が発話の場で共有している情報である。もう1つは、発話の場では話し手のみがアクセス可能な情報、すなわち、話し手が経験した試験の難易度である。話し手はこの2つの事態を主観的に関連づけ、話し手しか知りえない情報を「のだ」によって発話の場に提供する。聞き手は、そのようにして話し手が発話の場に新たに加えた情報を、話し手と共有している情報に関連させて解釈するというのが「のだ」による伝達の基本であるという。

本研究では、これらの「既定性」と「関連づけ」という2つの視点から、「のだ」「のか」の「使用条件」と「非使用条件」の理解を検討する。大場 (1995) は、「のだ」「のか」の誤用を、①非用：使うべきところで使わない ②過剰使用：使うべきではないところで使う、の2つに分類している。また「非用」は「使用条件」の不理解から、「過剰使用」は「非使用条件」の不理解から起こるものであるとしている。趙 (2008) は、大場に基づいて「のだ」「のか」の使用条件と非使用条件を導くフローチャートを提案した。本研究は、これをさらに発展させ、「のだ」と「のか」について、使用すべき条件（「使用条件」）1種類と使用すべきでない条件（「非使用条件」）2種類を設定する。使用条件は、「既定性」と「関連づけ」の両方がある場合であり、非使用条件は、「関連づけ」の有無に関わらず「既定性」がない場合（非使用①）と、「既定性」があり「関連づけ」がない場合（非使用②）の2種類である（図1）。

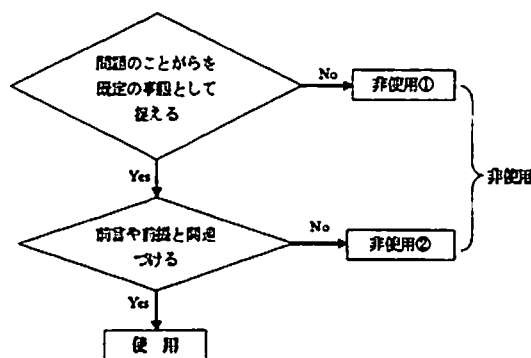


図1 「のだ」「のか」の使用条件・非使用条件のフローチャート

3. 方法

3.1 調査対象者

2008年9月に、中国の西安外国語大学で日本語を専攻する2年終了時の学生112名（女性84名、男性28名）、3年終了時の学生112名（女性96名、男性16名）の合計224名に対して、総合的な日本語能力テスト（実施時間の合計は120分）を実施した。彼らは全員日本への留学経験はない。年齢は、最も低かった学生が18歳5ヶ月、最も高かった学生が26歳5ヶ月であった。

3.2 テストの内容とそれぞれの信頼性係数

テストは、四者択一式により総合的な日本語力を問うものである。「のだ」「のか」の使用/非使用が 72 問、文法知識が 36 問、語彙知識が 48 問、読解力が 12 問の 4 種類である。

「のだ」「のか」の使用/非使用のテストは、使用条件に関する 24 問（「のだ」「のか」各 12 問）と非使用条件に関する 48 問（各 24 問）から成る。4 つの選択肢の内訳は、「のだ」「のか」を含まないもの 1 つ、含んで文法的に正しいもの 1 つ、形態素の誤りを含むもの 2 つ、である。各問 1 点で、72 点満点である。「のだ」と「のか」のテストの信頼性について、全被験者 224 名の 72 問のクロンバックの信頼性係数 0.866 を得た。テストの信頼性は高かった。

文法知識テストは、構造の複雑性（例えば、疑問詞+も+否定の「どこへも～ない」）、局所依存（例えば、疑問詞の「どんな」、動詞の連体修飾の「焼いた」、副詞と否定の共起の「まだ～ていない」）、形態素変化（例えば、過去の否定で「～しなかった」、受身で「たたかれた」）の 3 つの下位カテゴリを設定した。それぞれ 12 問ずつから成り、各問 1 点の 36 点満点である。文法知識のクロンバックの信頼性係数は 0.733 と、高い信頼性を得た。

語彙知識のテストには、名詞、形容詞、動詞、機能語の 4 つの下位カテゴリがあり、各 12 問で 48 点満点である。文法知識のクロンバックの信頼性係数は、0.859 と高かった。

読解力のテストには、専門と一般の 2 つの下位カテゴリがあり、6 問ずつで 12 点満点である。読解力のクロンバックの信頼性係数は 0.514 であった。

4. 因果関係モデル

本研究では、SEM の手法を用いて言語習得の因果関係モデルを検討した。まず、日本語習得の基本的な知識である文法知識と語彙知識が、「のだ」「のか」の使用条件と非使用条件それぞれに影響を及ぼすという因果関係を仮定した。次に、「のだ」「のか」の使用条件の理解が基盤にあり、その上でこれらを使用しない非使用条件に影響するという因果関係を考えた。さらに、「のだ」「のか」の使用条件と非使用条件が、より一般的な日本語理解を表す読解力に影響を及ぼすと仮定した。分析には、SPSS 社の AMOS 17.0 (2008) を使用した。

4.1 観測変数と潜在変数

テストで測定した 13 種類の観測変数に基づいて、①文法知識、②語彙知識、③「のだ」・「のか」の使用条件、④「のだ」・「のか」の非使用条件、および⑤読解という 5 つの潜在変数を導いた。「文法知識」は「構造の複雑性」「局所依存」「形態素変化」の 3 つの観測変数、「語彙知識」は「名詞」「形容詞」「動詞」「機能語」の 4 つの観測変数、「『のだ』・『のか』の使用条件」は「『のだ』の使用条件」と「『のか』の使用条件」の 2 つの観測変数、「『のだ』・『のか』の非使用条件」は「『のだ』の非使用条件」と「『のか』の非使用条件」の 2 つの観測変数、「読解」は「専門」と「一般」の 2 つの観測変数で構成される。

4.2 本研究のモデルの適合度

本研究で得たデータがモデルに適合しているかどうか検討する。カイ二乗適合度検定の結果、モデルとデータに有意差はなかった [$n=224$, $\chi^2=62.773$, $p=.220$, *n.s.*]. GFI (goodness-of-fit index) は 0.961, AGFI (adjusted GFI) は 0.935, CFI (comparative fit index) は 0.993 と、いずれも 1 に近く、高い適合度を示した。最後に、標本数と自由度で基準化したカイ二乗統計値である RMSEA (root mean square error of approximation) も、0.025 と高い適合度を示した。これらの指標がすべて高い適合度を示しているため、本研究のモデルとデータはよく適合していると判断できる。

4.3 確認的因子分析

図2は、SEMにより導いた「のだ」と「のか」の理解に関連する因果関係モデルを示す。まず、潜在変数として仮定した「文法知識」に対する各観測変数の貢献の度合いについて、構造の複雑性の標準化係数が0.72、形態素変化が0.71、局所依存がやや低く0.62であった。文全体の構造を正しく理解しているか(構造の複雑性)と、動詞や形容詞の変化が正しく理解できているかどうか(形態素変化)の2つがとりわけ大きく貢献しており、この種の知識が文法理解において重要であることが分かる。これら3つの観測変数の標準化係数は、すべて0.1パーセントレベルで有意であった。

次に、「語彙知識」の潜在変数に対しては、最も貢献度が大きいのが動詞で、標準化係数は0.84であった。次に大きく貢献しているのが形容詞であり、標準化係数は0.78であった。続いて名詞が0.77、機能語が0.74であった。これら4つの観測変数の標準化係数は、すべて0.1パーセントレベルで有意であり、いずれも語彙知識にとって重要であることを示した。

「読解力」に対しては、専門の標準化係数が0.67で、一般が0.56であった。本研究のデータでは、専門性のある文章の理解のほうを読解力全体により大きく貢献していることが分かる。いずれも0.1パーセントレベルで有意で、両者とも読解力への貢献があることを示している。

最後に、「のだ」「のか」の理解について、まず「使用条件」に対する各観測変数の貢献の度合いを見ると、「のだ」の使用条件が0.74、「のか」の使用条件が0.71とほぼ同じくらいの標準化係数を示した。また「非使用条件」を見ると、「のだ」の非使用条件が0.88、「のか」の非使用条件が0.87であった。これらの標準化係数はすべて0.1パーセントレベルで有意であった。

「のだ」「のか」の理解には、使用条件および非使用条件のいずれについても、「のだ」と「のか」がともに大きく貢献していることを示している。

4.4 潜在変数間の相関および因果関係

因果関係モデルを構築するにあたって、文法知識と語彙知識はどちらが先に習得されるかを想定するのは難しい(Dixon & Marchman, 2007)ことから、この両者については一方向の因果関係ではなく、対称的な相関関係を仮定した(図2で双方向の矢印で示している)。両潜在変数間の推定値による相関係数は0.79と非常に高く、その値は有意であった($p < .001$)。

それ以外の潜在変数間の因果関係を見ると、まず文法知識から一方向の矢印で示した「のだ」「のか」の使用条件への因果関係は標準化係数が0.67であり、「のだ」「のか」の非使用条件への因果関係は0.84であった。使用条件でも非使用条件でも影響力は有意であった(使用/非使用とも: $p < .001$)。それに対して、語彙知識からの因果関係については、「のだ」「のか」の使用条件に対する標準化係数が-0.10、「のだ」「のか」の非使用条件に対する標準化係数が-0.01であり、有意ではなかった(使用: $p = .601, n.s.$; 非使用: $p = .943, n.s.$)。「のだ」「のか」使用条件と非使用条件には、文法知識が強く影響しており、語彙知識はほとんど影響しないことがみてとれる。

次に、「のだ」「のか」の使用条件から非使用条件に対しては、標準化係数が-0.68で有意であった($p < .001$)。「のだ」「のか」の使用条件から非使用条件への強い負の因果関係が認められる。

さらに、「のだ」「のか」の理解から読解力への因果関係については、使用条件から読解への標準化係数は0.17で有意ではなかった($p = .401, n.s.$)が、非使用から読解への標準化係数は0.38で有意であった($p < .05$)。また、文法知識から読解への因果関係は標準化係数が-0.05で有意ではなかった($p = .866, n.s.$)が、語彙知識からは標準化係数が0.54で有意であった($p < .01$)。

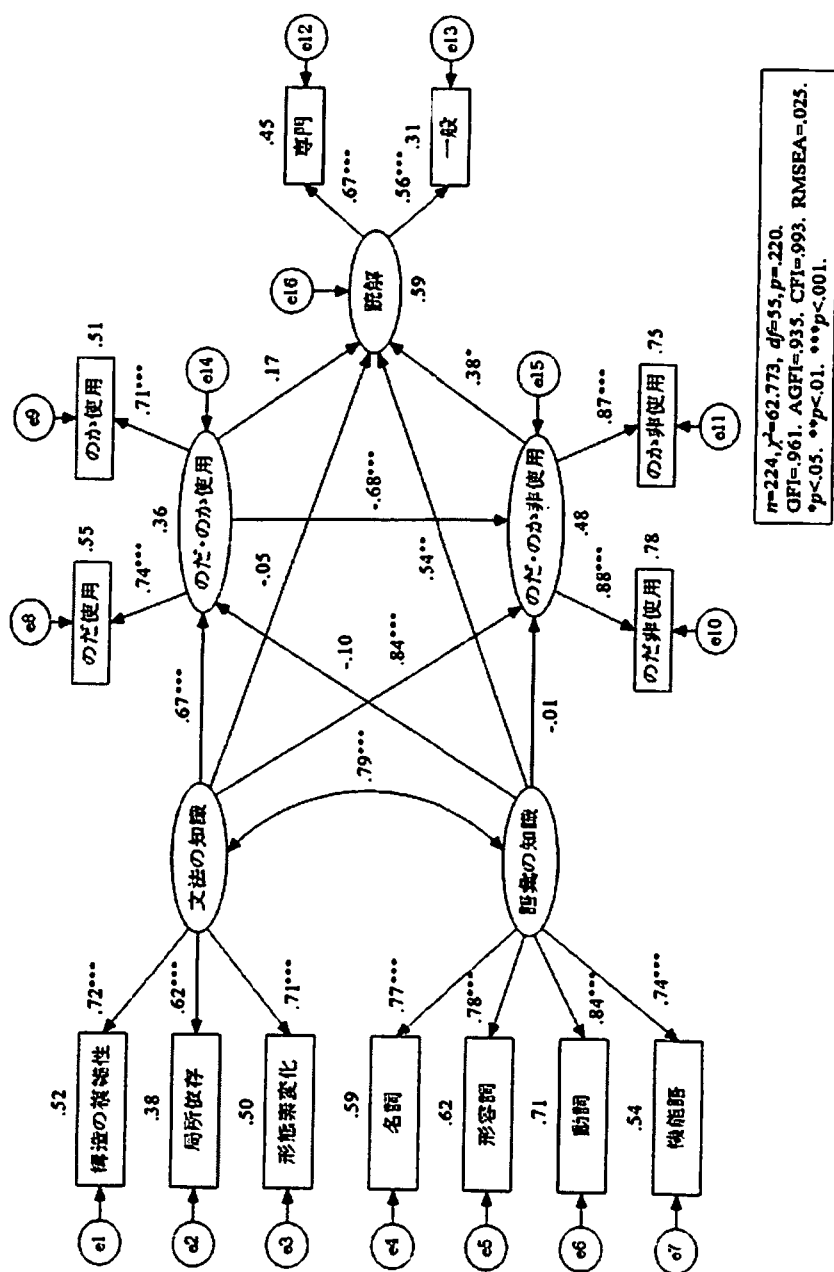


図2 文法の知識、語彙の知識、統解、及び「のだ」「のか」の使用/非使用の因果関係

5. 考察

本研究では、総合的な日本語能力テストを実施し、「のだ」「のか」の使用および非使用の習得をめぐる因果関係について、SEMの手法を用いて総合的に分析した。複数の適合度指標は、本研究のデータは仮説として想定した因果関係のモデルと合致していることを示した。以下、このモデルから導かれる3つの観点について論じる。

第1の観点は、語彙および文法の知識と「のだ」「のか」の使用/非使用条件の習得の因果関係についてである。SEMが示した因果関係モデルでは、「のだ」「のか」の使用条件および非使用条件の理解に対して、語彙知識の影響は見られなかったものの、文法知識は強く影響していた。文法の知識が、「のだ」「のか」の使用条件および非使用条件の習得の基盤となっていることが分かる。「のだ」「のか」は、基本的には文法項目の一部であると位置付けられる。

第2の観点は、「のだ」「のか」の使用条件の理解から非使用条件の理解への因果関係である。本研究のモデルは、「のだ」「のか」の使用から非使用への強い負の因果関係を示した。これは、「のだ」「のか」の使用条件（使用の選択が正答）の得点が高い学習者ほど、非使用条件（使用の選択が誤答）の得点が低いことを意味する。つまり、本研究で対象とした中国語を母語とする日本語学習者に「のだ」「のか」の過剰使用の傾向があることが示唆される。彼らは、日本語母語話者の話し言葉の中で「のだ」「のか」が頻繁に用いられるのを知ると、これらを多く用いようとして使うべきでない文脈や状況にも適用させてしまうことがあるのであろう。実際、全被験者224名の「のだ」「のか」の使用条件の平均正答率は70.79%であるのに対して、非使用条件は45.56%と低かったことから、使用条件の習得よりも非使用条件の習得のほうが難しいことが分かる。しかし、文法の知識が「のだ」「のか」の非使用の理解に対して非常に強い正の因果関係を示しているため、本研究の学習者の中でも豊富な文法知識を持っていれば、過剰使用はせず、使用すべき場合と使用すべきでない場合とをともに正しく判断できることがみとれる。ここからも、「のだ」「のか」の習得に文法知識の確立が必須であることが窺える。

第3の観点は、「のだ」「のか」の使用/非使用条件の習得から読解力への因果関係である。「のだ」「のか」の使用条件からは、読解力に対する有意な因果関係が認められなかった。一方、非使用条件からは、読解力への有意な正の因果関係が見られた。つまり、「のだ」「のか」の非使用条件が正しく理解できている学習者ほど読解力が高いことを意味する。日本語教育の主要な到達目的の1つである読解能力を促進するためには、「のだ」「のか」を使用すべき条件を正しく理解することはもちろん大切であるが、むしろ「のだ」「のか」を使用すべきでない条件を正しく理解することのほうがより重要であることがみてとれる。本モデルがこのような関係を見せるのは、「のだ」「のか」が非常に広い機能を担っており、文脈や状況といった文構造以上の広範囲の情報を理解し処理できる能力と結びついていること（野田 1997）によると考えられる。「のだ」「のか」と語用論的能力との関係性を検証することが今後の研究課題となろう。

日本語教育現場では、どのような場合に「のだ」「のか」を使用すべきかとともに、どのような場合に使用すべきでないかを学習者が理解するための指導方法を確立する必要がある。

引用文献

- 大場理恵子 (1995) 『『のだ』『のか』の習得上の困難点について』『言語文化と日本語教育』9, 229-245.
小金丸春美 (1990) 「作文における『のだ』の誤用例分析」『日本語教育』71, 82-195.
近藤安月子 (2008) 「第21課 出来事との関連—ノダとワケダ」『日本語学入門』研究社, 117-122.
田野村忠温 (1990) 『現代日本語文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院
趙萍 (2008) 「中国人日本語学習者における「のだ」「のか」の習得—使用条件と非使用条件をめぐって—」『日本語教育』137, 11-20.
野田春美 (1997) 『「のだ」の機能』くろしお出版
村松恵子 (1995) 「中国語話者の誤用例からみた日本語の『のだ』表現」『名城大学人文紀要』30(2), 27-